

大きな神戸中の新校舎



4月20日、文教福祉委員会で神戸中学校の新校舎を視察しました。神戸中は本年9月に現在地からの全面移転をする予定で、新築工事を進めています。すでに校舎や体育館の建物は完成し、グラウンドや外周工事が行なわれています。この日は、まだ中の設備や備品のない、がらんどうの校舎内に入りました。

すべて2階建て、広い廊下の両側に教室を配置

上の写真は、校舎の外観です。2階建ての教室棟が3棟ならび、それをEの字の形につなぐ棟に職員室や図書室などが配置されています。校舎の1階は特別教室、2階が普通教室となっています。また体育館は武道場と一体です。外観はコンクリートのままの灰色一色で、今までの学校のイメージとは異なります。



右の写真は、校舎内の廊下です。木が多く使われていて、落ち着いた感じですが、

教室が両側にあるのですが、廊下側には窓がなく、壁になっています。病院かオフィスのような感じで、ここもこれまでの学校と違うところです。この建物に大勢の子どもたちが入ると、どんなムードの学校になるのでしょうか。

設計図の段階から気になっていることは、教室の風通し、夏の暑さや冬の寒さに対してどうだろうか、という点です。各教室に天窗があって、そこを風が通って、日光が入る設計になっているとのことですが、特に北側の教室が心配です。「冷房も暖房もしない」という前提で、しっかりと検討がされたでしょうか。9月の引越しまでに、再チェックすべきだと思います。

旧電通学園跡地に「防災公園」計画

南玉垣町の広大な「NTT西日本鈴鹿研修センター（旧電通学園）跡地」の活用方法が課題となっていました。3月26日の市議会全員協議会の場で、北側の7.3ヘクタールを鈴鹿市の「防災公園」にする計画が報告されました。この場所は以前から「桜の名所」として市民に親しまれてきた所です。

右の概略図の、右側が「防災公園」7.3ha、左側が「市街地整備」17.6haの計画地、中央は鈴鹿医療科学大薬学部です。



1

「都市再生機構」が建設し鈴鹿市が引き取る

この計画は、事業主体が鈴鹿市ではなく、独立行政法人都市再生機構（UR）が整備工事を行ない、完成したものを鈴鹿市が引き取るという方式です。またURは、公園だけでなく「市街地整備」事業も同時に行なうということです。防災公園の事業費約30億円のうち国の補助が11億円、市負担は19億円となります。

問題点としては、公園には直接関係しませんが、「市街地整備」計画用地の中にある「戦争遺跡」旧鈴鹿海軍航空基地の格納庫をどうするか、という問題があります。地主のNTT、事業主体のURは、保存しようという考えは持っていないようです。

国保税10%引き上げ可決される

3月議会に提案されていた国民健康保険税の引き上げ案は、26日の本会議採決の結果、賛成多数（反対は6人）で可決されました。共産党市議団は本会議や委員会の中で反対の論陣を張りました。また、年金者組合や民主商工会などが「鈴鹿の国保を良くする会」をつくり、たくさんの署名を集め、議員への要請などの活動を繰り広げました。本年分の課税額の通知、第1期納付となる7月に向けて、引き下げや減免の運動を引き続きすすめましょう。

（増税に反対した議員）

森川ヤスエ、石田秀三、板倉操、大西克美、中村浩、市川義高

川岸市長の給与20%カット、目的は？

鈴鹿市は生活保護不正支給事件での返還金5849万円を、関係した職員などの「寄付」を集めて返済することになりました。この事件に関連して、川岸市長の給与を1年間、20%減額するという議案が3月議会に出され、可決されました。しかし、この20%が何なのかがハッキリしていません。

というのは、市長給与は昨年1年間も10%カットしているのです。その理由は「経済情勢の急激な悪化を考慮して」と説明されました。今年は昨年と比べて、税収がさらに落ち込むなど経済情勢は良くなっていません。したがって、給与カット10%は継続すると考えるのが常識で、今回の20%カットのうち、生活保護事件に関係するカット分は10%となります。

私はこの点を、議案質疑でたどしましたが、20%は「総合的に判断」したものとの答弁で、経済情勢でいくら、生保事件でいくら、とは答えませんでした。新聞報道も、20%の360万円が返済に充てられるように扱っていますが、10%ならば180万円となり、返済総額が変わってきます。

このような曖昧さを残しながら、5849万円全額の返済がきちんとできるのか、職員の皆さんが寄付に応じるのか、疑問です。「二度とこのような不祥事を起こさない」という行政トップの決意が感じられません。

市内全公園の施設管理計画を立てる

新年度予算に「公園施設長寿命化計画策定事業」というメニューが出ています。これは、市内295ヶ所の公園施設・遊具などを総点検し、今後の改修や更新を計画的に行なっていく、「事後的」から「予防保全的」に転換するものだとのことです。子どもたちがよく使う公園での事故が、たびたび報道されますが、これを未然に防止しようという姿勢は歓迎です。

議員の「費用弁償」3000円廃止に

議員が議会の会議に出席すると支給されていた、日額3000円の「費用弁償」をやめて、自宅から議会までの交通費（1^{キロ}当たり37円）に改定する条例改正が、3月議会で決まりました。以前から私たちが廃止すべきと求めていたもので、4月から施行されます。また、県下の全ての議会でも日額制は廃止となりました。

ずいそう



また一人いなくなった

好きだった有名人がまた一人亡くなったというニュースは、つらくて寂しい。作家・劇作家の故井上ひさし氏は、その本も芝居も面白くて楽しくて、また「9条の会」のよびかけ人として平和憲法を守る運動に尽くすなどの社会的活動も一貫していて、私は大のファンであった。

「ひょうたん島」のドン・ガバチョ、トラヒゲ、ダンディ、「ネコジャラ市」のベンキョーチューなどの登場人物は、いまでも鮮明に思い出すことができる。井上ドラマはいつも、セリフや歌が山盛りでにぎやかで、悲劇も喜劇になって、しかしテーマはしっかり押さえてある。井上氏も何かの本に「一に趣向、二に趣向、三、四がなくて五に思想」と書いていた。

代表作「吉里吉里人」でも、バスで回りながら議論する「国会議事堂車」や、半身をつないだ犬「イッタカキタカ号」などが登場し、極めつけは、古代の黄金の隠し場所がトイレの、その名も「金かくし」だったというオチで、いま思い出しても笑ってしまう。井上氏は言葉を自在に操り、言葉で人を惹きつけ、言葉で敵と戦う達人だった。

控えめだけど、力強い応援団だった

井上氏は共産党との因縁も浅からずあり、現夫人は衆議院議員も務めた党幹部・故米原いたる氏の娘さんである。10年ほど前に不破哲三氏と共著で出した「新日本共産党宣言」は、井上氏が共産党を信頼しつつも、ちょっと引っかかっているいろいろな疑問に不破氏が答えるという、入門書のような本である。その中で井上氏は、日本国憲法の「国民主権・人権の尊重・永久平和」という大事な原理を守ることが何より大切であり、「そのように考えている私としては、たったの一票ではありますが、しかし私にとってかけがえのない大切な一票を日本共産党に投じるようになりました」、また「かねてから、農業対策と中小企業対策、そして外交は日本共産党が一番、筋が通っていると思っていましたので、それが証明されて気分がいいです。」と述べている。井上氏のような、控えめだけど力強い応援団がいなくなったのは残念である。それ以上に、この日本で平和と民主主義を、誰にも分かる言葉で語ることのできる文化人を失ったことは、本当に残念なことである。